

## 基調講演 I

チョ・ヒヨン（聖公会大学校社会科学部教授、NGO大学院院長）

### 【講演概要】

この発表は、「社会的・階級的相克のプロセスを通じて新たに構成される歴史的・現在の構成物」として民主主義を規定し、民主主義の促進的力と解体的力の相克に注目し、韓国民主主義と政治の激変過程を分析しようとするものである。

韓国の政治体制を、朝鮮戦争以降、1950年代の「親米反共分断体制」、1961年から1987年までの軍部「開発独裁体制」、1987年6月の民主大抗争以降の「民主化体制」、2008年以降、新保守政府の出現以降の「ポスト民主化体制」の時期に区分し分析を試みる。まず、親米反共体制下では、極右反共主義の覇権的支配のもと、「政治の治安化」が起こった。次に、軍部開発独裁下では、政治の暴力的抑圧が現れたが、その後、開発の矛盾と独裁の矛盾に対抗し、韓国現代史の最大の政治的転換点となった「1987年6月民主大抗争」が起こった。1987年以降、韓国社会は民主改革を時代的課題とする体制に移行した。この民主化体制は、反独裁民主政府10年の時期に、一方では民主改革の議題（過去清算など）が高い水準で実現し、もう一方では、民主進歩勢力が独裁に抵抗するのには成功したが、世界化の挑戦に挑戦するには失敗して新自由主義的フレームを積極的に受容し、「転換的危機」を迎えることになり、ポスト民主化体制に移行することとなる。このポスト民主化体制下で民主主義の構成的な相克が依然として行われている。2012年の大統領選挙で、前独裁者・朴正熙の娘が大統領に就任し第二次新保守政府が出現するなか、反独裁民主化運動の象徴性を持つ民主党の政治的リーダーシップの亀裂、進歩的大衆運動の弱化、進歩政党の「四分五裂」などの状況で、韓国民主主義は新しい挑戦を受けていると言える。